

『世間子息氣質』論

篠原進

「新しい進歩的な立場にたつものこそ、古典を真に理解しうけつぐことができる」——羽仁五郎『ミケルアンジェロ』——

日本には、言葉の正しい意味でのルネッサンスは無かったかも知れない。しかし、イタリアルネッサンスについての右のマキシムを、西鶴に引き合わせて考えることは許されるであろう。花田清輝流に表現するなら、西鶴は古典を否定的媒介として、新しき古典を作した。このことは何も世之介が、「出来業平」（『好色一代男』巻二の三）であり、「俗源氏」（『こゝろ葉』）であるから言うのではない。『一代男』（以下、書名は適宜略号を用いる）に、古典のパロディー以上のものを読むからである。すなわち、『一代男』は『仁勢物語』ほど古典に密着してもしないし、『真実伊勢物語』ほど拒否してもしない。^二そこには、古典に抛りつつも、それに囚われない強靱な心魂が湧出しているのである。極論するなら、西鶴にとって古典とは、学ぶべき存在であると同時に、対立し乗り越えるべき対象であった（勿論、西鶴の作品を個別に考察すれば揺れが見られる。しかし、今は深入りしない）。

当然のことながら、この西鶴の姿勢には、天和・貞享・元禄期の人々の意識が反映している。けれども、これを時代精神として一括してしまふことには問題がある。例えば、同時代人である西村市郎右衛門^三。彼を評して、都の錦は言う、「好色文の達人、西村市郎右衛門筆を振うて西鶴を消す」（『元禄大平記』巻一の三）と。なるほど、書肆特有の嗅覚で羊頭を懸^{ふか}げるのには長けていた。すなわち、彼は『好色三代男』（貞享三）、『（好色）諸国心中女』（同）等と、題で読者を魅惑する。また、実際ジャーナリスティックな感覚も、非凡なものを持っていた。例えば、西鶴の『五人女』に先んじて「お夏・清十郎」「お萬・源五兵衛」の小歌に注目したり（『三代男』・巻二の四）、「樽やおせん」の流行歌（『同』・巻三の

七)に触れることなどである。しかし、それら諸作の無難な内容は狗肉としか言いようがない。文体の古さ「「いまそかりける」(『御伽比丘尼』卷三の三)調」、貞女譚(『心中女』)等々、前時代の遺風から脱皮し得てないのである。

ところで、右の考察を重ねることは、私を必然的に一つの疑問へと逢着させずにはおかない。すなわち、西鶴と西村とを浮世草子というジャンルに同居させる、従来の文学史の方法についてである。しかし、これについても今触れるのは止そう。ただ、次のことだけ言っておこう。ルネッサンスは、革新的精神を以て古典に学ぶ者のみが、迎える資格を有する、と。

そして、いつしか西鶴自身が「古典」となった。つまり、後続作家が彼の作品を創作の手本として学ぶような、そんな存在となったのである。ここに西鶴模倣・剽窃の時代が胎動する。その因は、都の錦を訪ねた「難波の書林」の次の言葉に凝縮されている。

「當世の仮名物は。すべて文章の艶に構はず。詞花言葉を飾らずとも。唯野鄙なる俗語ヲ打込。(廿五ウ)一の字も引かぬ凡夫の耳に。

よく聞ゆるやうに編給へ——(中略)——兎角かな物は。西鶴流にしたため給へ」(『御前御伽』^五総論)。

勿論、当時の読者層については、必ずしも明瞭というわけではない。しかし、西鶴の浮世草子とその拡大にひと役買ったということはいえるのではない。つまり、彼の成功によって各書肆は出版が事業として、商行為として充分成り立ち得ることを確認した。なかでも、「永う流行るは好色本」(『元禄太平記』卷一の二)という如く、好色本に旨味があった。そして、その好色本の先駆者は、他でもない西鶴である(「西鶴が軽口ぬれ文の発明」・『同』・卷一の三)。そこで勢い、西鶴が模倣・剽窃されることとなるのである。この風潮は、(独自の作風を持った後の一風や夜食時分などは別として)衣鉢を継いだ団水は勿論、西鶴嫌いの都の錦まで覆うこととなる。しかし、彼らの場合どんな精巧な鍊金術を施しても、イミテーションの域を出なかった。

ところが、同じように模倣・剽窃から出発しながら、其磧の場合多少違っていた。彼は他の作家よりはるかに徹底して西鶴のエビゴネンとなろうとする。そして、そのことを寧ろ誇らしげに告白する(『野傾旅葛籠』序^九)。それは、浮世草子としての処女作『色三味線』(元禄一四)は勿論、『曲三味線』から(宝永三)晩年の『咲分五人娘』(享保二〇)に至るまで、一貫して続く。しかし、そんな形での文章修業は、いつしか彼にそれなりの独自性を与えることとなった。柳沢淇園は言う、

「すべて、その其磧が文章には、妙成所有と知べし。なにはのもと西鶴に出て、西鶴よりも又一だんあたらしき所あり」(『ひとりね』^一上

・二八

と。しかも、その新しさ・独自性は次の如き批判と背中合わせなのである。

「西鶴が著せし書どもは俗中に雅ありて頗る筆力を見る。はた、其碩・自笑等が諸作は語・意ともに俗中の俗にして、巻を終へるにたへず」（『宿直文』序）。

以下、其碩の特質が顕在化して来た時期の作品である『世間子息氣質』（正徳五）を多面的に検討することを通して、その新しさの実態や、その他の問題点に迫りたい。すなわち、剽窃に出发した其碩は、「一つの思想の借用は、思想的背景の共通を予想する」（阿部次郎『徳川時代の芸術と社会』（角川選書）二七四頁）という宿命から、ここまで逃れ得なかったのであるが、この期に至ってやっと独自の世界への冒険心が出てきたような気がするのである。それは、とりもなおさず西鶴から一步抜け出ることを意味する。因みに、各節の構成は次の如くする。

(一) (二) (三) 『子息氣質』の方法（剽窃を中心として）。(四) 成立の背景。(五) 主題と意義。(六) 文体・まとめ。

一

『子息氣質』に於ける剽窃については、既に滝田貞治、河盛好蔵、長谷川強、西島孜哉の各氏による指摘がある。これに私見を加えると次の如くなる。

〈凡例〉

○剽窃の規準については「原文で二行以上に互る類似」を基本としたが、それ以下のものでも私的判断で掲げたものもある。

○掲載したが疑問の残るもの、行文の順序に差のあるものなどは、それぞれ「?」「順不同」「前後」などと記した。

○組版の都合上、原題・原文と多少差のできたものがある。(例)『俗つれく』↓『俗つれづれ』。

○注一二に示した先学の御指摘は次の略号で示し、私のものと区別した。

①滝田貞治氏↓(滝) ②河盛好蔵氏↓(河) ③長谷川強氏↓(長)

<『子息氣質』剽窃表>

章	項目	『子息氣質』当該箇所	行数	被剽窃書	指摘者
序		①「梓にちりばめ～助ならんかし」	1	①『二十不孝』 (序)	(滝)
(巻の一)		①「常住香の物業～始末に身をかため」 ②「箸かたし外へちらさず」 ③「譲りをうけて～難義にあはしぬ」 ④「氏は千金にもかへじ」 ⑤「左の手して箸をもてど～語らせて」	7 1 13 1 7	①『永代蔵』 (巻2の2) ②『永代蔵』 (巻1の2) ③『永代蔵』 (巻4の1) ④『二十不孝』 (巻5の4) ⑤『織留』 (巻6の2)	(滝) (滝) (滝)
(一の二)		①「ふたりの親は～容儀もがなと」	2	①『二十不孝』 (巻1の4)	(滝)
(一の三)		①「山吹色の真剣商ひ～とよばれ」 ②「つぎつぎの袋もたせて」 ③「日まはし銀の～魯陽が戈をうらやみ」 ④「されば人間～了簡してゆるしぬ」 ⑤「子がゆすり～おやちおどろかれ」	2 1 5 6 2	①『敗毒散』 (巻3の2) ②『二代男』 (巻5の5) ③『敗毒散』 (巻4の3) ④『織留』 (巻3の3) ⑤『好色盛衰記』 (巻2の3)	(長)
(二の一)		①「倩世間を見るに～目あり耳あり」 ②「医者所の所へ色々の人の文句」	23	①『新可笑記』 (巻2の4) ②『胸算用』 (巻5の3)	(滝) (滝)
(二の二)		①「智恵才覚には～髪をおろさせ」 ②「く～子を育てる苦勞話など」 ③「町人の家業～無常を覩じ」 ④「白旗龍につくつて」 ⑤「光陰流水の如く～速に暮て」 ⑥「骨牌場面の描写」 ⑦「外門あらけなく～つかひなり」	6 7 1 1 2 3	①『二十不孝』 (巻1の4) ②『二十不孝』 (巻4の3) ? ③『織留』 (巻1の1) ④『名残の友』 (巻5の6) ⑤『敗毒散』 (巻5の3) ⑥『御前義経記』 (巻8の1) ? ⑦『五人女』 (巻4の2)	(長) (長)
(二の三)		①「六十余州の～いふにやおよぶ」 ②「惣じて人の～かたちはなかりき」 ③「たわけものは是じゃ是じゃ」	7 16 1	①『敗毒散』 (巻4の3) ②『二十不孝』 (巻5の3) 順不同 ③『俗つれづれ』 (巻5の2) ?	(滝) (長)
(三の一)		①「次第に分限に～隠れなし」	10	①『二十不孝』 (巻4の2)	(滝)
(三の二)		①「曾子は鈍魯～益ならめ」	3	①『敗毒散』 (巻4の3)	
(三の三)		①「大勢の子共の～是をかし」 ②「親父ばかりは～出る事もならず」 ③「七歳の時～婿をあけ」 ④「塩肴も目にかけて～よみて買」	5 (5) 2 2	①『胸算用』 (巻5の2) ②『織留』 (巻3の3) 前後 ③『置土産』 (巻3の2) ④『二十不孝』 (巻3の2)	(滝) (長) (滝)
(四の一)		①「氷は水より出て～知るべし」 ②「手づからきせて～業ぜんさくする」	2 5	①『敗毒散』 (巻2の1) ②『二代男』 (巻1の4)	(滝)
(四の二)		①「扶桑第一の大湊～夢をならべ」 ②「表蔵旭にうつりて～煙たてける」 ③「長堀のながれのすゑ～材木」 ④「三十余人の手代～利徳を得」 ⑤「ひとつも～此作徳」 ⑥「古物を持ち乞食」	2 1 1 3 3 6	①『永代蔵』 (巻1の3) ②『二十不孝』 (巻1の1) ③『嵐無常』 (上の1) ④『永代蔵』 (巻3の1) ⑤『織留』 (巻3の3) ⑥『智恵鑑』 (2の20) ?	(滝) (滝) (長) (長) (長)
(四の三)		①「ほぼ全文」	77	①『懷硯』 (巻2の1)	(滝)
(五の二)		①「ほぼ全文」	63	①『敗毒散』 (巻4の1)	(河)・(長)
(五の三)		①「富貴にして苦あり～おほし」 ②「近年孔子頭に～日影者といはれて」 ③「十禅寺の日雇～手まはしよく」	2 5 9	①『二十不孝』 (巻2の1) ②『二十不孝』 (巻4の4) ③『敗毒散』 (巻1の1)	(滝) (長)
計		本文 1,239行 (序を含む)	318	無印は筆者	

序・本文の総行数一、二、三、九行（章題などを除く）。一方、剽窃個所の総計が三一八行で、全文の四分の一。被剽窃書名は、上位から、『二十不孝』（11）・二『敗毒散』（8）・三『永代蔵』（5）・四『織留』（5）・五『胸算用』（2）ということになる（括弧内は登場の、のべ回数）。勿論、剽窃の規準の採り方で右の数字は揺れるし、『定本西鶴全集』（索引）の刊行など今後の研究の進展によって補足される部分も多いと思う。その意味で、右の表は永遠に未定稿なのであり、文学を数量的規矩で読もうとすることの方法的限界もある。いずれにしろ、必要なのは数量を超えた考察である。以下、具体例で其積の剽窃法について考えてみる。

まず、其積の剽窃の仕方であるが、それは次の三種に大別し得ると思う。すなわち、(A)丸取り・(B)寄せ集め・(C)分割である。^{一三}

(A)丸取り ⑦丸取り 代表的な例は巻四の三と巻五の二である。二五頁の表の如く、前者は仮死という突発的な事件によって顕在化する家族のエゴと欲とをモチーフとした『懷硯』（巻二の一）に拠り、後者は当然戒められるべき遊里通いを、逆に公認奨励された際の当惑、といった皮肉な人間心理を描く『敗毒散』（巻四の一）に拠る。両書に共通するのは、読者に横手を打たせるところで、どんでん返しを有していることだ。「何ぞかはつた思ひ付もせば、向棧敷の下迄、入りを取ルはしれた事」(『色三味線』鄙の四)と、断言する其積であつてみれば、この二章の採用は充分、計算した上でのことだと思う。勿論、彼なりに加筆をしてはいる。しかし、それについては先考もあるし、私自身その加筆に従来言われている以上の意味を認めていないので、触れない。ただ、この方法が安易であることは否めない。また事実、この方法を用いて、氣質とは名ばかりの諸書が登場して来る。すなわち、

(1) 先行諸書の寄せ本 ↓『寛濶大臣氣質』（享保三）。(2) 改題本 ↓『当世女容気』へ『好色五人女』を（享保五）。(3) 改題増補本 ↓『和国小性氣質』へ『男色小鑑』を（延享三）等々である。氣質物先驅者として咎なしとは言えない。

④書き換え 例えば、好色・相撲好・あやつり好きの三兄弟を描き分けた巻二の三。ここで次男の相撲好きを描く際、同じように相撲を材とした『二十不孝』（巻五の三）を適宜書き換えている。また、剽窃に少しでも加筆があればこれに該当するので、この例は極めて多くなっている。ところで、其積にはストーリーを書き換えて、先述のどんでん返しを策したものがある。『二十不孝』に取材したものを『子息』以外から二例ほど挙げておく。^{一四}

(a) 『二十不孝』 (巻五の一)

兄と夫とが長い漁に出での留守中、一家は困窮し、掛乞いに責められる。そんなことに頓着なく、娘(小さん)は踊りの稽古などして、異見する母に逆い不孝を尽す。これと対照的に兄嫁は、自分の持ち物を質入れしてまで姑を育み、掛乞いの同情を得ることとなる。兄達帰、小さん追放。

(a) 『娘容氣』 (巻五の二) (享保二)

兄が西国への小間物商いで留守。妹(おたつ)が独身ということを除き、ほぼ設定同じ。しかし、こちらは追放後の妹の放埒ぶり、不孝が不幸へと繋がる過程などが、兄嫁(おそめ)の孝と幸と対照的に描かれている。

(a'') 『商人家職訓』 (巻二の一) (享保七)

前半の設定はほぼ同じ。ただし、こちらは弟(浪之助)で、親の病氣や掛乞いの責めにも頓着なく、踊りの稽古ばかりしている。そのひどさを掛乞いが詰ると、「惣じて役者は舞拍子事、踊などが第一なれば」と答え、道頓堀の役者として身を売り、親の人参代にするための稽古という。掛乞いは感心して、これを養子にする。

同一の素材が主題に添って如何に書き換えられたか、明瞭であろう。特に『商人家職訓』(巻二の一)の場合、其頃の愛読者が「ああ、またか」と失望しかけるのを、後半で見事に外し、どんでん返しの快楽を提供してくれるのである。

同じ方法が『諸商人世帯形氣』(巻六の三) (元文元)でも見られる。ここに材を提供した『二十不孝』(巻三の三)は、龍の細工を沈めて水中にある漆の横領を図った親子が、精を得た龍から罰を被るという話。一方、其頃の場合は、丁寧とその筋を追いながら、後半に山場を設定する。すなわち、男は漆を得た金で、貧しさのため遊里に身を売っていた娘を助け、その残りの漆も代官にさし出して、漆横領の罪を許されるというストーリーをとるのである。なるほど、最終章をハッピーエンドとするのは当時の常套であるから、驚くに足らないかも知れない。しかし、山出しの男が遊里で醸す滑稽に焦点をあてるなど、『世帯形氣』に於ける縦横な改変ぶりは注目して良いと思う。

とにかく、ここまでの考察から言えることは、其頃の場合、剽窃に付随する消極的なイメージとは隔絶しているし、むしろ積極的であり、攻撃的でさえあるということである。彼は被剽窃書にいつまでもオマージュを捧げてはいない。つまり、もし、その書が丸取りに相応しからぬ

時は、食欲に手を加えていくのである。

二

(B)寄せ集め これは複数の書を剽窃し、一つの表現とする方法である。主として、人物の性格や風景などを描出する際用いられ、其積は自らの拙劣な描写力を、この方法を導入することによって補っている。

⑦人物 例えば、△各當ぶり▽の描写。一例を卷三の三で示す。

①大勢の子共の毎日つかひする。反古のまろめたるをひろひ取。一枚／＼はのばして日毎に屏風屋張貫人形の細工入方へ賣て。人しらぬ錢をもふけ(△)。其錢にて内より持来る外に判紙をもとめ。紙つかひ過して自由なる子共に。一日一倍ましの(23ウ)利にて是をかし「万事わるひすらくくふ断も臺所をはなれず。食たき男が朝夕のあまり物を。沢山に乞食にとらす迄のせいたうをし。其小頼悪き仕形。」②親父ばかりは悦びて一生身を持そこなふ者にあらずと。手代共に末々たのもしく云わたされしに。いよく十六七の此世の人にかはりて。とかく外へまじはる事なく。義理をかきてこまかなる算用して。「つゐにあだ錢一文つかはず。」③七歳の時かき初に、桃色のふんどし買て石町の娘よりおくり給りしを。今に其一筋にて埒をあけ。「朝起るからねる迄始末の事をいひやまず。」④塩肴も日にかけてねだんをし。計芋も百を何程と数よみて買。「親の仕米りし家米出入の者までの。盆正月の祝儀さへ費の至りとやめさせ。閑々迄眼をくばれば。」(△)大勢の召仕ふ者も一日物見遊山に出る事もならず。

この章は「始末形氣」と題し、若旦那の度を越した儉約が手代達の離反を招き、結局彼は勘当されるという珍話を扱っている。

まず①の部分では、『胸算用』(巻五の二)に於ける「手習の師匠」の言葉を借りて、幼時からの各當ぶりを描写する。原文に「あまた」とあるのを「大勢」としたり、傍点部を加筆したり、(△)の部分に師匠の感想があるのを省略したり、反古を集める子と、判紙を利付で借す子とは別人なのに、一人の人間とするなどの工夫を重ねつつ導入するのである。

続いて、「」の部分では其積得意の誇張を加え、『織留』(巻三の三)を借りた②へと繋ぐ。ここでは、年齢を一歳引き下げたことを除け

ば、原文の「あんど」を傍点部の如く改め、「菟角」を平仮名にするなど平易な文にする改変が中心となっている。また、「織留」では△⑧▽の文がすぐに続くのであるが、其積はこれといきなり繋ぐことはせずに、③④と五行分の挿入をする。

すなわち、五行目の「」部分の加筆の後、③に『置土産』（巻三の二）で見た面白い表現を借用するのである。ここでの改変は、「絹」↓「桃色」、「中橋」↓「石町」等であるが、後者の因は「中橋」が前文（未掲）で既出していることから、と考えたら良いであろうか。前者の場合は、強いて挙げるなら「桃色」の方が幾分具体的とも言える。しかし、いずれにしろ深く詮索するに値しない改変であることは確かだ。

六行目の「」に続く④の場合も同様である。『二十不孝』（巻三の二）を剽窃したこの部分では、漢字を平仮名に直した程度である。以下、「」で誇張を重ねた後、先述の△⑧▽に再び戻る。

とにかく、ここでの例で言えることは、其積の徹底した剽窃ぶり、それを合理的に構成・整理仕直す才の非凡さである。この傾向の顕著な例として巻四の二が挙げられる。この章は、大坂の桶分限が後継者を決めるため、三人の子の知恵試しをする話であるが、その中に「掘出し」で失敗する次男が出る。その名、源九郎。何故こういう名を付けるのか。その理由は、最後の五行（21オ）で明瞭になるのである。すなわち、源九郎は好物の掘出し（古道具購入癖）を諸人につけ込まれ、偽物を掴まされて袖乞いとなるのであるが、そこを「源九郎は狐にばかされたやうになつて」と表現する。狐の異名である源九郎（『和漢三才図会』^{一五}）を利かすのである。ここでやつとネーミングの意図が水解する。勿論、この名のヒントが、既に剽窃した『二十不孝』（巻一の二）の「長崎屋伝九郎」にあったのかも知れない。しかし、それなら一層改変が問題となるし、其積の周到さという私の説を補完することになるのではないだろうか。

さて、右の例は落語のオチ・サゲと一脈通じるような気がするし、その源流である咄本との関係も問題としたいが、後節で多少触れるに留める。

①風景 再び、巻四の二で例を示す。^{一六}

①扶桑第一の大湊人の心も大氣にして。それ程の世を渡る難波橋より西見たしの百景。数千軒の間丸臺をならべ。「はんじやうの」②表蔵旭にうつりて。夏ながら雪の曙かと思はれ。豊なる御代のためし松に音なく千年鳥は雲にあそび。かぎりもなく打關き。「蜆とる濱迄も小借屋建つどき。」

それ／＼の家職して朝夕の煙たてける。③爰に長堀のながれのすゑに木曾山の材木を請て。「抓取のある時節思ふ(6ウ)まゝにもふけこみ。大坂から瓦の軒高く」④三十余人の手代を抱近國の木山をうけ心の海ひろく。仕合にのって来る帆柱の買置に。ねがひのまゝなる利徳を得。

この章は先述の如く、大坂の楠分限(材木屋)が三人の子息の器量定めをすることが中心となっているのであるが、そのマクラとして大坂を描写する際、右の如き表現が用いられている。まず①で、『永代蔵』(巻一の三)の表現を借りる、「大商」⇨「大湊」・「大腹中」⇨「大気」などと改変した後、一行目の「」で②の『二十不孝』(巻の一)からの剽窃文に繋ぐ。②に続く「」に『二十不孝』は信長時代との差を言う(因みに、其磧は同部分を『親仁形氣』巻二の一の冒頭に使う)が、それを例文の如く簡潔にする。③の表現は、『商人軍配圖』(巻二の一)(正徳二)にも「長堀の流れの末に。木曾山の材木屋せし歴々」とある如く、其磧の常套句でもあり、『嵐無常物語』(上の一)からの剽窃と断定は仕難いが、とにかくこれを経て、「」で④『永代蔵』(巻三の一)に繋ぐ。

以上が風景を描写する際の剽窃ぶりである。ここで問題なのは、其磧はこれらの表現を語んじていたのだろうか、それとも、原本に朱筆など入れ、別紙に書き抜き整理しておいたのであろうかということである。この点に関して示唆を与えてくれるのは、先掲の剽窃文である。これを見ると、改変も理詰めであるし、やはり「其磧メモ」というようなものがあって、それを適宜用いていたと考えるのが妥当なのではないかと思う。西鶴に「筆蔵」という覚書があり、述作の源となった(『名残の友』跋)ということは伝説化しているが、其磧の創作ノートは、剽窃ノートだったのではないかと思われるのである。以上の考えを裏付けるため、今度は少し角度を変えて、被剽窃書の側からながめてみたい。

三

(C)分割 これは剽窃の技法とは異なるが、剽窃の準備段階として用いられる技法なので、ここに挙げた。また、これまで専ら西鶴剽窃について述べたので、ここでは其磧の剽窃範囲の広さを示すため、夜食時分『好色敗毒散』(元禄一六)との関連について考えることとする。

二五頁の剽窃表で特筆すべきは、『敗毒散』からの剽窃の多さである。さらに注目すべきは、特定の章を集中的に剽窃していることである。

西鶴なら『織留』（巻三の三）が該当するし、『敗毒散』は巻四の三にその例が見られる。後者の例を多少煩瑣ながら書き抜く。

①六十餘弱の名物の土産は御出入申す御大名より拝領し、御紋付の時服は江戸鑑を衣桁にうつし、和漢の書畫何百軸といふ事を知らず、曜變建盞、井戸、三嶋、粉引、熊川などの茶碗は繩からげにして幾箱の内と書付し、名物の茶器は長持に押込み。古金襴の夜着蒲團、印金の幕、印子の狸百足、珊瑚樹の棒百本、〔A〕金銀米銭はいふにや及ぶ——（以下百三十字略）——②是を思へば身上よき人のあまり利發過ぎたるも心もとなし。へ少し南風の方こそ益ならめ。へ曾子は鈍魯けれども道統の傳を繼ぎ、石川五右衛門は利發なれども釜煎にあふためし、へまた中分の身軀にてへ③日廻し銀の算用も知らず、覚帳は上書する時に見たばかり、讀みおほせても公家にはならぬ三十一文字に首をかたづけ、韵字をふみて花を眺め、金を煮やして雪を楽しみ、裏借屋こぼって、座敷を建て、女郎請出して爰に置くなど、夕暮の鞠に魯陽が戈を羨み、

——『浮世草子名作集』（評釈江戸文学叢書）所収本に拠る——

其積は、まず①の部分を巻二の三に剽窃する。『子息』の話は、中京で大名貸の惣大将をしている男の三人子息の悪性ぶりがモチーフとなっているが、その親の全盛ぶりを形容する際ここを借用するのである。〔A〕の部分に「白銀の天目百盃^{ぼくぱい}瑠璃の箸^{はし}百膳^{ひゃくぜん}」と誇張を加える他、ほとんど改変なしで用いている。

続いて②の部分は、へ少しへを省略し、そこを挟んで前後を逆にして、巻三の二に剽窃する。その章では、酒嫌いの親仁が裏をかかれる話を中心となっているが、この部分を冒頭に配置し、むしろ親仁への警句として作用させるのである。

次に四行目のへへを省略して、③を一の三に剽窃する。そこには「太鞍形氣」とあるが、実際はそれら太鞍に「折敷の川流し」をさせたり、心中の狂言で親を欺したりする悪性子息の話。③の部分は、その子息の遊興ぶりの描写に借用されている。改変は「も」↓「さへ」の他、傍点部を「かゝりをこしらへ」と直し、下文の蹴鞠と合致させるよう工夫している。

以上、前節とは逆の立場から、其積が自分の創作に利用できそうな材料を如何に分解し、食欲に食い荒したかを見た。勿論、先述『敗毒散』（巻四の一）や『懷硯』（巻二の一）の如く、本當に気に入ったものは、全文剽窃してしまうのである。其積の読書には、こういった取材の一面もあったのではないだろうか。そして、その際手元には必ず、例の「剽窃ノート」が準備してあったのではないかと思うのであるが如何であろうか。ところで、江戸文学に造詣の深い、ハーバード大学のヒベット博士は、大学院での講義に於いて、其積氣質物の警句的導入に因し、『子息氣

質』（巻四の二）と『同』（巻二の二）との例を挙げられた（武田勝彦氏筆記^{一七}）。しかし、後者については長谷川強氏御指摘^{一八}の如く、『二十不孝』（巻一の四）の剽窃であるし、前者は「氷は水より出て水よりつめたく。大盡の嘘は女郎にならふて女郎よりすさまじき世のすがた。狐が人にばかされるゝにてしるべし」とあり、これが傍点部のみ改変（「客」↓）し、『敗毒散』（巻二の二）を剽窃したことは明瞭であろう。重箱の隅に拘泥するようであるが、付言しておきたい。

勿論、だからといって博士の着眼の鋭さが、価値を減ずるわけではない。特にその警句的導入（それも剽窃部分を）に関しては一考の必要があると思う。このことも、後節で触れることとする。

さて、私なりの方法で其積の剽窃ぶりを考えてきたのであるが、この節のまとめとして、それら剽窃の孕む問題点について考えてみる。論を拡大する意味で、ここは『子息』に先行し、三年前の正徳二年に出された『商人軍配團』（巻一の二）に例をとることとする。

この章を読んですぐに想起されるのは、『永代蔵』（巻二の二）との類似である。つまり、そのプロットを整理すると次の如くなる。

① 始末親仁八十八歳で死ぬ。息子二十一歳で跡を継ぎ、親に劣らぬ吝嗇ぶりを見せる。

② 或る時、道で島原の局女郎への文を拾い、中に沓歩あるのを喜び横領しようとするが、文面に同情して届けてやることにする。

③ 相手の女は病氣らしくて、会えない。

④ そこで、どうせ拾った金と思い遊びに使う。それを契機として遊び出し、いつしか粹となり四五年中に没落。

続いて『軍配團』を見ると、①の設定はほぼ同じ。但し、吝嗇ぶりの誇張が激しい。例えば、『永代蔵』は次の如くサラリと描写する。

◇世をわたる業を大事にかけて。腹のへるをかなしみて火事の見舞にもはやくは歩まず。

これに対して、『軍配團』は同部分を剽窃した後、次の如く付け加える。

◇親の齎きにつり取くらゐにて。桶の輪かへさすにも門に立番して。乞食とあらそふて。古輪をあつめ。大風の朝はちりゆく屋ね板をひろいて薪と悦び。「塩肴買も日にかけてねだんをし。斗芋も百を何ほど数よみて」

誇張ぶりが明瞭であろう。さらに、ここで注目すべきは「」で囲んだ部分である。これは、『二十不孝』（巻三の二）を剽窃したものであ

り、其積は後に『子息氣質』（卷三の三）でも、再び同部分を用い剽窃することになる。つまり、常套的表現としてこのようなものをストックしていたことの証となり得るのである。また、そのことは先程来述べてきた「剽窃ノート」の存在をも裏付けることに成り得ないだろうか。

③の部分を見る。『軍配團』は違う展開をみせる。つまり、予想以上に貸倒れの金が回収できたので、債権者達は損したつもりで、東山で遊興することとなる。

④では籤で当った主人公が白人の技巧に溺れる破目になり、⑤で『永代蔵』と同じように次第奢りとなる。しかし、こちらはあっさりと没落させはしない。つまり、内儀（芝居好み・衣装好み）・手代（石垣町通ひ・内証商ひ）・出入の者（菜好み）と、主人の行状に合わせて連鎖反応を起こし、没落という経過をたどるのである。すなわち、こちらは『軍配團』の題名の如く、主人のリーダーシップを問題としているのである、さらには、それを背後であやつるところの黒白の玉（ここでは貧乏の白玉）の趣向に添った本作りをしているのである。

なるほど、その意味に於いては『軍配團』は『永代蔵』よりも面白いし、何よりも平易で俗耳に入り易い。しかし、その過程で『永代蔵』の内包していた微妙な味わいをも切り捨てることとなってしまったのである。

例えば、『永代蔵』では文を読んだ主人公が同情し、文と沓歩とを遊女に届けることを決意した際、次の如く描写する、「すこしは鬢のそゝけを作りて」と。さすがに中村幸彦氏はこの隻語を見逃さず、「この男にもその本能のあることを匂はせ、この些事にまつはる色と金とがこの主人公の心へ投げた陰影を巧みに出した」（『西鶴の創作意識とその推移』『近世小説史の研究』）と、明敏な読みを示された。すなわち、この微妙な表現が以後主人公が色狂いで没落していくことの伏線となっているのである。この点其積はどうか。なるほど、「其身もそゝけし鬢をなでつけたる事もなく」という表現がある。しかし、これは親仁の「吝嗇さ」の形容に用いられているのであって、全く狙いが異なる。そこで、他に似た表現を探すと、次の如きものとなる。

◇（内儀は）さし櫛ぬきて。（21ウ）亭主の鬢なでつけてまゐらせ。

◇櫛かづきし手代は鬢つきあらため。伽羅の油でいためつけ。男みがきて石垣町へ出かけ。

これでは、主人公の何気ない動作に託し、その末路を暗示したという原拠の妙味は色褪せてしまう。同時に、深読みする読者のみが味わい得た、知的発見の喜びをも奪ってしまっているのである。しかし、翻って考えてみれば、当時の読者がどの程度深読みし得たであろうか。また、例え深読みが相当程度可能であったとしても、果してそういうものを喜ぶ読者が何人いたであろうか。古今東西を問わず、大衆文学の読者は、風景や性格に關しての詩的な、精密な描写などよりむしろ、話の面白さや筋の奇抜さを喜ぶのではないだろうか。勿論、其積自身右の如き深読みが出来ていながら、敢てそれを無視して大衆化を図ったとは考えにくい。ただ、逆にそういった彼の読書力の未熟さが、より大衆的な読者を発掘するという面では、むしろよい結果をもたらしたような気がするのである。

以上、其積の剽窃ぶりを型に分けて考え、その剽窃ぶりが攻撃的なこと、剽窃を寄せ集めて誇張を企てるなど技巧的なこと、「客齋」「大坂」などと項目別に分類し、描写に借用する「剽窃ノート」の存在が推測されることなどを述べてきた。ただし、其積がそのように専ら、平易化・技巧化・趣向化に氣を配ったことは、作品の微妙な味を失わせることともなった。しかし、そのことが逆に広範な読者を獲得させる結果をもたらしたのではないかということである。

都の錦は言う

「詩に換骨の法をゆるし。哥に古人の詞をとれと。先達のをしへなれば。今都乃錦が文章に西鶴がいひ捨を用ひたりとて。さのミ疵にもあらず。古きを以て新しきとするへ。皆名人の所為ぞかし」(『元禄大平記』卷一の四)と。

△名人▽であったかはどうかは別として、右の弁明は都の錦よりも、其積に相応しいと考えるのであるが如何であろうか。

四

さて、少し視点を拡げて『子息氣質』成立の背景・主題・意義などについて考えてみる。

曾て藤岡作太郎氏は、其積の氣質物が西鶴に源を発していることを示唆し、その嚆矢として『寛濶役者片氣』(正徳元^{一九})を挙げた(『近代小説史』)。そして、その後の研究は、氣質物(特に『子息』以降のもの)と西鶴との関連を論証する方向に進み、それなりの成果を挙げた。^{二〇}

また、その一方で、八文字屋との確執や「氣質」の語義についての考察など、多角的な検討が要請され、それに答える示唆に富んだ諸研究が公にされてきている。例えば、「伊川先生」(『子息』巻二の二)に注目し、『子息』は程頤の完成させた氣質論の通俗的翻案である、とする石川潤二郎氏の研究(『江島其磧氣質物敘説』『国文学研究』第一八号・昭和三三)がそうであるし、長谷川強氏は其磧の創作意識と『子息』の成立論とを関連づけている(『浮世草子の研究』)。すなわち、長谷川氏は好色物・町人物(『軍配團』・『商軍談』)の構想で方法的に行詰った其磧が、

「不孝を契機とする珍奇談を集めた」「二十不孝」にヒントを得て氣質物を案出したという。そして、新しき町人物として、氣質物を『軍配團』・『商軍談』などと連続させるのである。これに反論するのが西島孜哉氏で、氏は氣質物が『二十不孝』にヒントを得ているということには同意を示しつつも、構成よりも「かたぎ」を重視したという点で町人物とは断絶があり、方法的飛躍があったとするのである。

以上が氣質物成立に關しての数少ない争点である。これらに關して私の考えを少し述べる。まず、誰しもが説く、氣質物に翳す西鶴の影の大きさ。この点に異論はない。それは私自身前節迄に述べてきたことでもある。また、その中でも特に『二十不孝』からの影響が大きいということも首肯できる。なぜなら、「孝にすゝむる一助ならんかし」という序文の近似もさることながら、キャラクターの類似、また、中心人物が何故『子息』であり、『娘』(並行して構想されていることは、『子息』付載の予告で知られる)であるかを考えれば、一層接近ぶりが明瞭となると思うからである。しかし、既に述べた如く、その關係が西鶴にとどまらないことも事実で、『敗毒散』など他の作者の作品にも、取材、剽窃範圍が拡大していることは、補足しておかなければならない。

次に、(例証は難しいが)八文字屋との確執が氣質物誕生への外因となっていることも認めて良いし、更に一步踏み込んで江島屋の名義人である子息市郎左衛門への物足りなさが、これを生んだとする私小説的見方でもないことはない(因みに、其磧は前年「正徳四」大仏餅の家督を叔母婢に譲り、入道して宋栄と名乗っている)。

しかし、先掲の石川潤二郎氏の説はどうであらうか。なるほど、其磧が『朱子語類』に代表される氣質論に対して理解を持っていた、という論にはかなりの説得力がある。ただ、そのことが果たして、「通俗的翻案」とまでストリートに繋がるかどうか。第一に「程伊川」の名は、『子息』と關係の深い『敗毒散』(巻五の二)に既出するし、『子息』の引用部も「伊川先生の語に貴賤ともに生を請たる程の人は。醫道をしらはかなはざる事」という程度の短かさである。勿論、知っていることを凡て出す必要はない。しかし、韜晦ということの不得手な其磧であっ

てみれば、その氣質論に触れない不自然さは否定できない。また、△趣向▽としての氣質なら、むしろ遡って『商人軍配團』に於ける黒白の玉に近似を指摘し得るのではないか。以上の理由で、石川氏のセンスの良さに感服しつつも、完全には賛同仕兼ねるのである。

その点、其磧町人物と関連づける長谷川氏の論は堅実である。私なりに裏付けを挙げることまでできる。例えば、先述『軍配團』（巻二の二）の「始末」は、『子息』（巻三の三）と共通するし、巻二の二「目利き」での失敗は、『子息』（巻四の二）の「掘出し」での失敗に似る（但し、この類は団水『昼夜用心記』（宝永四）・月尋堂『儼偶用心記』（同六）などに多い）。更に、兄弟を対照的に描く巻四の一・二は、『子息』（巻二の二・三・四の二）に頻出するのである。また、『商軍談』では「町人形氣」（巻一の三）「旦那殿のお形氣」（巻二の三）「商人形氣」（巻三の一）（巻四の三）という具合に、「形氣」が多用されている。その意味で、この「かたぎ」への注目が氣質物にはじまるという前提で組み立てられている西島氏の論は、町人物・『商軍談』の事例だけから考えても少し説得力が弱い気がする。

さて、以上の如き理由で、『子息』成立に関しての、私の論は長谷川氏の延長線上に在るのであるが、諸氏の論を充分認めた上で、仮説を提示しておきたい。

私が注目したのは、前年（正徳四年）に刊行されたと思われる『後豆右衛門女男色遊』である。すなわち、『魂膽色遊懷男』（正徳二）の続編として出た豆男物なのだが、そこに次の如き記述がある（北海道大学図書館所蔵本より引用）。

「今時の出家形氣（筆者）ほどおかしきはなし智恵才覚にはかまはず武士の家にては、弓馬の藝（筆者）にうとく又病者（筆者）にしてつとめの成がたきをすゝめて衣をきせ。町人ハ算用おろかに秤目（筆者）おぼへず。日記づけさへならざるをととも商人には思ひもよらず。世を楽（筆者）に墨染（筆者）になれと親類（筆者）了簡（筆者）の上にて髪をおろさせ」（巻五の四）。

一読して分る如く、『二十不孝』（巻一の四）の剽窃である。ここで、『二十不孝』剽窃が『子息』に先行していることにまず注目したいし、次に「出家形氣」とあること（「多少品は落ちるが、他に「隠者形氣」になってゐる作蔵」（巻一の四）という用例もある）、更に全く同じ部分が『子息』（巻二の二）に再び剽窃されていることである。その『子息』の章題に言う、「内證（筆者）はしらぬが佛有難（筆者）ひ出家形氣」と。以上の三点は、『子息』成立の問題を考える上で見逃すことの出来ない重要な示唆を含んでいると思う。なぜなら、『二十不孝』への接近もさることながら、その風俗描写に際して、「形氣」という語で人間の生態を集約させた部分を剽窃しているからであり、その剽窃の仕方が『子息』と極めて近似して

いるからである。なるほど、既に述べた如く『商軍談』などでは「形氣」という言葉が頻出しているし、風俗描写の時その不得手な其磧が、「剽窃ノート」を用いるのは常套であった。その意味で語句の酷似は当然であり、奇とするに値しないかも知れない。しかし、ここには、そういった一般論で片付けられないものがあるのではないか。誤解を恐れず言うなら、其磧にとって『女男』と『子息』とは、極めて隣接した存在だったのでないだろうか。勿論、前者の内包する枕本的な性格との、本質的な差を認めないわけではない。しかし、其磧の創作意識という点で、両者の根は近いと思うのである。何故なら、豆男シリーズは豆右衛門の「覗き」という視点で捉えた、「当世女の好色形氣」なのであるから。その意味に於て、先掲巻五の四が、『女男』の最終章に配置されていることは象徴的である。すなわち、『女男』を擱筆した時、其磧の頭の中に「形氣」を題とした次作の構想が芽生えていたのではないかと考えるのである。しかし、これは少し飛躍しすぎであろうか。とにかく、以上が『子息』に注ぎ込む其磧町人物の太い流れと併せて、『女男』の細流をも重視したい理由である。

五

主題を考える段階に來た。『子息』の主題を明確に捉えるのは難しい。勿論、それらしき言辭がないわけではないし、むしろ数は多い。例えば、「孝にすゝむる一助ならんかし」（序）であり、「司馬溫公の語に。子をやしなひてをしへ（4オ）ざるは父のあやまちなりとかや。」（巻一の二）といった調子である。特に後者は、全編を統轄する冒頭の章で、「産宮につかはるゝ小歩行の小法師」が木賊売に対して、当代の子息達の跳梁ぶりと親のだらしなさとを嘆じた際用いられた言辭であり、注目に値する。しかし、一皮剥けば前者は衆知の如く、『二十不孝』（序）の剽窃であり、後者は『古文真宝前集』などに出る極めてポピュラーな格言で、其磧自身、後に『商人家職訓』（巻一の二）（享保七）や『諸商人世帯形氣』（巻一の二）（元文元）などでそれほどの意味もなく度々引用している。そのうえ『子息』の場合、各章の書き出しで使われる警句的表現はほとんど剽窃であり、諺からの借用である。こう考えると、其磧が前掲の如き言辭をどの程度本気で吐いているのか極めて疑問となつて来る。すなわち、コンテクストを考え先掲の二文を繋ぐと、次の如くなる。「今のダメ息子氾濫の因は、専ら親の教育の悪さにある。だから、この『子息氣質』はその諸例を反面教師として示し、孝行を勧める助けとしたい」と。しかし、それをストレートに『子息』の主題とし、

創作の理念とするには、右の如くあまりにも反証が多いのである。それは内容についても言える。例えば、町人の武芸好きを描いた「侍形氣」(巻一の二)。ここでは、それがために一度は勘当を請けながらも「芸が身を助」けて、結局は侍奉公が叶うこととなる。そこを結ぶ、「年月たしなミし武藝^{ぶげ}の功^{こう}今此時にあらはれぬ」と。先掲の創作理念に則って書かれたとしたら、田中伸氏の御指摘の如く、随分おかしい結末である。理念に従うなら、少なくとも結末は、子息の勘当か没落で結ばなくてはならない。実際、『子息』にヒントを与えた『二十不孝』は、そういう方向をとっていた。つまり、その(序)で「生としいける輩^{たぐひ}孝なる道をしらすんは天の咎^{とが}を通るへからす」と標榜し、「天是を罰し給ふ」(巻一の二)と結んで、因果応報で首尾を一貫させているのである。

なるほど、『子息』と『二十不孝』との差は、リズム・その他様々な要素を挙げることが出来る。しかし、何といっても決定的な差は、この『子息』に於ける創作理念の不統一・喪失ということではないだろうか。因みに、この傾向はその後続出する気質物にも共通し、結果的に気質物の停滞を招く。其蹟以外では、南嶺の『母親容氣』(宝曆二)然り、和沢太郎(上田秋成)『妾形氣』(明和三)も例外でなく、亀友『誹人氣質』(宝曆一三)に至っては、詐欺に遭った男がその金を取り戻すという筋の長編で、たまたまその男の職業が俳諧の宗匠であるというに過ぎない。つまり、気質物の理念は崩壊して行ったのではなく、最初^{はな}っから曖昧だったのである。それは、『子息』を『御旗本容氣』(宝曆四)と対置させることで鮮明になる。すなわち、後者は理念を持っているという点で気質物の中の鬼子である。そこには、武士の墮落ぶりに対しての怒りがあり、理想の武士像が繰り返し求められている。それゆえ、^八今^八に^八対^八して^八投げ^八つけ^八られる^八言葉^八の^八棘^八は^八鋭^八い^八。翻^八って^八『子息』は^八どう^八か^八。其蹟は別に理想の町人像を求めたわけではない。彼にとっては町人の墮落も「さまざまなる浮世」の一つであり、積極的にコミットしようとはしないのである。そのため、教訓的言辭を吐く際も、剽窃や諺で代用させてしまうのである。これは一口に言えば、あまり自分を表に出そうとはしない都会的傍觀主義^{二六}ではないだろうか。

この意味に於て、気質物の本質を「類聚法の一くふう」(『新版日本文学史4』至文堂)と読むのは正しい。しかし、何も言ったことにならない。なんとなれば、それはテーマの喪失を確認したに他ならないからである。それでは、『子息』のテーマ探しは放擲すべきか。そんなことはないと思う。搦手からならいくらかでも攻めることが可能だ。例えば『書言字考節用集』(巻九)は、次の如く記す。

氣質^二八^二ココロムケ^二八^二

このことから、△世の人心▽を描いた西鶴に対し、其磧は△世の人のコロムケ▽を書いたという程度のことは言えると思う。それでは、その△コロムケ▽とは何であろうか。これを描くに際し『二十不孝』の子供達の△コロムケ▽が、ヒントを与えたことは容易に推察できる。

しかし、私には「一番むすこ」(『好色万金丹』巻四の二・(元禄七))のキャラクターが気になってならない。すなわち、「惣領の甚六」を地味に、あの阿呆な子息である。彼は初女郎買に際し、金の価値を知らず、鏈手がつりを携えて追いかけて来るのを、追加徴収と勘違いして逃回り、追い詰められて自殺する。浮世離れもここまで進むと滑稽となる。銭を知らず「お雛様の刀の鏢」と見立てる落語種の子息に似たおかしみがあり、それはまた『子息』の主人公達とオーバーラップするのではないか。つまり、世間知らずという点では、武道好み(巻一の二)・歌好み(巻三の一)・古道具好み(巻四の二)の子息達も、更に「狂言狂いの若旦那」(『役者色仕組』享保五)も共通項を持っているのである。ここで、私が何故、夜食時分の作品にこだわるのか、その理由は後述する。

とにかく、『子息』に描かれる△コロムケ▽とは、特異なそれであり、正に『世間(離れした)子息氣質』なのである。その意味に於て、氣質の意を現代風に類型とか属性とかの意にとるのは正しくない。いったい、『子息』に描かれたような子息達が、果たして何人いただろうか。むしろ、そういう人間が少ない時代であったからこそ、読者に受け入れられたのではないだろうか。『子息』の面白さは、そのピカレスク的性格にあるのではないか。つまり、そこに登場する主人公達は、(一、二の例外もあるが)こぞってあまり奨励仕難い、反道徳的反社会的存在である。それは、続編である『娘』・『親仁』にも共通して見られる性格であった。しかし、読者にはその異常性格そのものが、自らの生活実相から隔絶したその点が、興味の対象なのである。そして、隔絶しているがゆえに、読者は(反面教師として読む場合を別として)現代の御伽話として、突き放して読むことが出来たし、そこに引き起こされる家庭悲劇は、むしろカタルシスの如きものさえ与えたのではないか。

ところで、右に悲劇と傍記したが、それが近松のものとは全く異質であることは、言うまでもない。少くとも読者には、喜劇としか写らなかった。何故か。それは、一に原因が親の甘さにあり、二に親自身がその甘さを充分自覚していないこと、三にその結果として、内的葛藤を欠き深刻な緊張感などが欠如している点にある。勿論、其磧の真意は親の責任追求という点には無かったし、それが棘の無い喜劇として読まれることは、むしろ本望であった。つまり、彼が描こうとしたのは「人間喜劇」だったのである。そして、その範は西鶴や夜食時分の作品にあった。また、二人は独自の咄のスタイルを持っているという点でも共通している。それを其磧は懸命に学ぼうとする。彼にとって、学ぶとは、盗

むことでもあった。しかし、その場合「糊と鉄」(滝田貞治氏・前掲書)のみでなく、彼なりの△趣向▽をも加えていたのである。

六

彼の狙いや工夫は、文体を考察することにより明瞭となる。『子息』の文体の特徴は、(一)平易、(二)理詰め、の二点に集約できる。しかし、私は第三にオチとして用いられた次の如き戯文も加えたい。

さしつぎの弟孫次郎ハ。数度の異見に相撲をやめず。つゝめには親に小勝をとられ。土俵よりまづ内をつき出され。いかなる手取も親には(27才)かたれぬといふ事を知つ。佗言しても門口に大関すハつてよせつけられねは。日比自慢の力もおちて。たよるべきかたもなく身の廻りを賣喰にして。今といふ今本の丸裸になつて。

(巻一の三)

相撲好きの次男の末路を「相撲仕立て」で、表現していく場面である。勿論、この言語遊戯の伝統は古い。例えば、『新撰狂哥集』(寛永五(三)年)にも「将棋仕立て」で作られた次の如き歌を見る。

金蔵主といふ法師かものまつり見てかへるとて道にてけんくはしてやりにてつかれあへなくはてければ
五月五日けいはかへりのきんさうすやりにつかれてひしやとこそしね

『嬉遊笑覧』(巻四下)にも引用され(但し、末語は「なれ」)、よく人口に膾炙した句である。注目すべきは、殺人に付随する深刻さ、暗さなどが、その戯文的表現の醸す滑稽味の陰で、すっかり除去されてしまっていることである。

なるほど、こうした縁語仕立ての文章表現は、西鶴のよくするところでもあった。しかし、問題は西鶴がそれを意図的に用いていたか否かである。なぜなら、「手法」とはそれを意図的に用いてはじめて確立するものだからだ。その判断は至難であるが、西鶴の場合(当該部分の『二十不孝』(巻五の三)などを検討してみても)その表現をあまり意識していなかったように思える。いや、逆に言えば彼の俳諧師としての豊かな

資質が、そんな意識を不要にしたのかも知れない。つまり、意図せずとも、そんなものは口を衝いて続々と出るのである。

この「滑稽を醸成する方法」としての戯文」を意図的に用いているのが、今日テクニカルチームで笑話本・咄本と呼ばれる一群である。例えば『鹿の巻筆』（貞享三）。ここでは冒頭（「ばんどや才介」）からして、双六の縁語で仕立てられた話である。其積自身もその文体は実験済みであった（例えば『商人軍配團』（巻一の三）の骨牌用語尽し）。

つまり、其積は咄本の常套である戯文を以て、浮世離れた人間を「滑稽」に描いた。ここまで雑多に述べてきた『子息』の特質、これを総合するなら咄本への傾斜ということではないか。浮世草子と咄本との差を明確に述べるのは難しい。ただ、後者は特徴として（一）描写よりも話の面白さを重視。（二）言語遊戯の多用。（三）オチの使用などが挙げられると思う。これに、その無テーマ性を加味するなら『子息』は其積の咄本といえるのではないだろうか。彼なりの滑稽本なのではないだろうか。実際、彼は『子息』の直前に、咄本的浮世草子『丹波太郎物語』（正徳五）を書いているし、『軽口咲顔福の門』（享保一七）・『軽口独機嫌』（同一八）に至っては完全な咄本である。また、『往昔善悪身持扇』（享保一五）では、第三節で触れた、諺や警句を導入として用いて一本を編むのである。更に、警句仕立ての文体は次の如く、『子息』に頻出している。

夜前の行作ぎょうさくのおまへにあづけて帰るハ。ひとへに上戸じょうどに封せぬ樽たるをあづけ。哥うたさいもの上手うづな美男びなんな手代に。若い内儀うちぎの供ともさせて。松茸たけのこ狩に山へやるやうな物で。（危険で）悪性あくせうな若い旦那だんなを片時ひとときもおかるゝ寺でなし（22オ）

（巻二の二）

これは長兄の乱行を見た手代（次兄の後見人）の述懐なのであるが、その言辞が「危険尽し」となっていることに注目したい。勿論、西鶴に類例がない訳ではない。例えば、「傾城狂ひのしまつと、下手に月代刺すほど。世にいやる物はなし」（『二代男』五の五）の如くだ。しかし、前者の方が遙かに意識的であることは明白だと思う。また、其積自身この方法も『子息』以前に、実験済みである。

（一）浮気なる若い医者いしやの薬のむと。下手したに月代刺さすと、むかふ足に疵きずの多い馬に乗と、器量のよい役者の若男に太鼓持せて女郎買ふほど

『野傾旅葛籠』（巻五の三）（宝永二）

（二）下手したにあたま刺すと、若い醫者の薬を吞程世に心かゝりなる物はなし

『丹波太郎物語』（巻三の七）（正徳五）

これらの戯文が『子息』を経て、以後其磧の常套句として定着していくのである。

例えば、西鶴の次の句は(三)〓(七)の如く改変して用いられる。

(A)「油断のならぬ世の中に珠更見せまじき物は道中の肌付金酒の酔に脇指娘のきはに捨坊主」(『五人女』巻四の三)

(三) 世の中に見せまじきものハ道中の肌付金と。短気な酒の酔に脇差と。それよりわけてあぶなきものハ。若ひ後家と嫁入盛の娘の宰領に。器量のよい音曲のなる手代を付て。湯治につかハすハひとへに郷をとらへて餌の炙のふたをさするやうな物でしばらくも油断のならぬものぞかし

『娘容氣』(巻四の二) (享保二)

(四) 盛立たる娘の子と、下手な上戸の髪結に髭そらすとは油断のならぬ物ぞかし

『役者色仕組』(巻五の三) (同五)

(五) 盛立った娘の子に。よい器量の若い男は見せまじきもの也。狼の咽に立た骨を手に入てぬいてやるよりは。油断のならぬ物ぞかし

『略平家都選』(巻五の三) (同二〇)

(六) 誠に盛だった娘と。道中の肌付金は。油断のならぬものぞかし。

『咲分五人娘』(巻三の一) (同二〇)

(七) 盛立る女と。猿に桃の木の番さするは、ゆだんのならぬうき世なりけり。

『風流連理榎』(上の二) (同二〇)

いや、そればかりでなく、その間其磧は、このアフオリズムに西川祐信の絵を添えて、『繪本答話鑑』(享保一四)・『繪本噺艸』(同二六)の二本を菊屋から出しているのである。以上が、其磧の文体面に於ける実験であり、冒険の概要である。

曾て、山口剛氏は滑稽本を定義する難しさを、次の如き名言に集約された(日本名著全集『滑稽本集』解説)。

江戸時代の通俗文學にして笑ひをねらひとせざるものありや

と。その意味で、『子息』を滑稽本の先駆などと輕薄に位置づけることは憚られるのであるが、氏がそこで嚆矢とされる『当世下手談義』(宝暦二)の序が次の如く述べ、(『禁短氣』や『身持談義』でなく)氣質物を意識していることを考えれば、強ち無理とは言えないのでないか。

「自笑、其蹟が娘形氣、息子形氣は、表に風流の花をかざり、裏に異見の実を含、見るに倦ず、聞に飽ず。是を當世上手の所化談義に比すべし」(野田壽雄先生校註『當世下手談義・教訓續下手談義』に拠る)。

少くとも、再び花田清輝流の表現を借りて、其磧は『子息』に於て、浮世草子と咄本とを（楕円の如く）二つの定点を持たせたまままで総合しようとした、と評するくらいは許されるのではないだろうか。

実際、八文字屋と確執し、正徳元年に江島屋を開業してからの其磧は、多くの意味で冒険に満ちていた。そんななかでも、彼の主関心事は八趣向^{三〇}にあった。それは、作品内部に留まらず、浮世草子内部の諸形式を開拓することにも及ぶのである。すなわち、氣質物の他

(A) 懷男物^{三〇} ↓『魂瞻色遊懷男』（正徳二）・『女男色遊』（同四）。

(B) 町人物 ↓『商人軍配團』（正徳二）・『渡世商軍談』（同三）。

(C) 時代物及びやつし物^{三一} ↓『今川当世状』（正徳三）・『通俗諸分床軍談』（同三）。

(D) 咄本的なもの ↓『丹波太郎物語』（正徳五）。

などである。勿論、それらの類型は西鶴の諸作品や、一風の作品などに見られた。しかし、其磧の場合自ら求めて作したという点で、評価して良いと思う。再び『ミケルアンデロ』（岩波新書）（一一頁）に言う、

眞の発見とは、どこかに偶然はじめて行ったとか偶然なにかをみつけるとかゆうことではなくして、求めて、発見するとゆうこと

と。この意味で、其磧の積極姿勢に日本のルネッサンス人の残り香を聞く思いがするのであるが、晶屑目が強過ぎるであろうか。

註

一 中村幸彦氏「俗源氏の論」『山辺の道』・昭和三〇年五月。

同氏「西鶴の創作意識とその推移」『近世小説史の研究』（桜楓社）など。

二 『二代男』と『伊勢物語』との関係については諸氏の指摘がある。また、最近では業平の關係する小野小町説話にまで研究が及んでいる（富士昭雄氏「西鶴の説話性」『講座日本文学・西鶴下』至文堂）。パロディとしての『仁勢』については、(1)富士正晴氏『パロディの精神』（平凡社）。

(2)野田壽雄先生（「仁勢物語」考）『帯広大谷短大紀要』（昭和三八年三月）(3)同先生『近世初期小説論』（第四章）（笠間書院）などに詳しい。

- 三 野田壽雄先生「西村本の浮世草子」『近世小説史論考』（稿書房）に詳しい。
- 四 例えば、『改訂日本小説書目年表』（ゆまに書房）では、『御伽比丘尼』を仮名草子としながらも、その改題本『諸国新百物語』を浮世草子として分類している。但し、野間光辰氏「浮世草子年表（日）（四）」（国語・国文）・昭和二十九年・一・三・七・九月）には、吟味と区別の工夫が施されている。
- 五 引用文・書名、ともに国会図書館東洋文庫（岩崎文庫）所蔵本に拠る。
- 六 野間光辰氏「浮世草子の読者層」『文学』（vol.26）五月。
- 七 武藤元昭先生「出版ジャーナリズムと読者」『日本文学の争点・近世』（明治書院）などの研究がある。
- 八 宗政五十緒氏「西鶴の研究」（未来社）所収の団水関係論文に詳しい。
- 九 拙稿「やつし放一都の錦の蹉跌―」『緑岡詞林』（第一号）。
- 一〇 所見本に（序）なし。水谷不倒氏「新撰列傳體小説史・前編」（春陽堂）に写真が載る。
- 一一 前二書の西鶴剽窃ぶりは、長谷川強氏「浮世草子の研究」（桜楓社）に詳しい。
- 一二 後者のそれは、拙稿「『咲分五人娘』とその周辺」『緑岡詞林』（第三号）でも触れた。
- 一三 引用・番号とも『近世随想集』（日本古典文学大系）・（岩波書店）所収本に拠る。
- 一四 (1) 滝田貞治氏「西鶴の書誌学的研究」（野田書房）。
- 一五 (2) 河盛好藏氏「夜食時分のことなど」『浮世草子集』（日本古典文学大系）・（岩波書店）・「月報」。
- 一六 (3) 長谷川強氏「浮世草子の研究」。
- 一七 (4) 西島孜哉氏「氣質物成立攷」『文学史研究』（一四号）。
- 一八 西島氏（註一二・(4)の書）は、私と別な視点から次の如き分類法をとられる。(A)文章のみの剽窃。(B)内容（かたぎ）をそのまま剽窃。(C)内容（かたぎ）を変えて剽窃。
- 一九 一四 『二十不孝』と『娘容氣』（題簽に拠る）との関連については、田中伸氏「氣質物の方法とその限界」『近世文芸』（第一号）など先考があるが、『家職訓』までの論の展開上必要なので敢えて引用した。
- 二〇 一五 因みに言う、「経^ニ数百歳^ヲ者多^ク而皆称^ニ人^ノ間^ノ之俗名^ヲ如^ク大和^ノ源九郎^ノ近江^ノ小左衛門^ノ」（卷三八）と。
- 二一 一六 西島氏（前掲書）の引用と重複する部分があるが、引用の意図も違うこともあり、好例と思われるので、それと断った上で挙げることにした。
- 二二 一七 『仮名草子集・浮世草子集』（日本古典文学全集）・（小学館）・「月報」。
- 二三 一八 二五頁の剽窃表参照。
- 二四 一九 宝永七年という説もある「長谷川強氏（「寛濶役者片気」と「和漢遊女容気」）」・『国語と国文学』昭和三十三年二月。同氏「浮世草子年表」。
- 二五 二〇 （註一二）の各書など。
- 二六 (1) 水谷不倒氏（註九の書）。(2) 中村幸彦氏「自笑其穢確執時代」『近世小説史の研究』。(3) 長谷川強氏「其穢自笑確執前後」『西鶴研究』（第

五集)など。

二二 註一二・(4)の書。氏には、他に「かたぎ」という観点をより詳しく説明された続稿(「浮世草子史の視点について」『文学史研究』第一五号)がある。

二三 西島氏も右の続稿の中で傍証を挙げて賛意を表している。

二四 高松亨明氏御教示。

二五 註一四の書。

二六 表現が聊か唐突であるが、都会文学・机上文学として其積の浮世草子を位置付ける視点は、『子息』の舞台が三都に固定していることと相俟って、是非稿を改めて論じたい。

二七 西鶴が「はなし」の作家であったことは、次の諸論文・諸書に詳しい。

(1) 野間光辰氏『西鶴新攷』(筑摩書房)。

(2) 同氏「西鶴五つの方法(一)」『文学』(vol.35)九月。

(3) 岡雅彦氏「西鶴名残の友と咄本」『近世文芸』(第二二号)。

(4) 陣峻康隆氏『落語の年輪』(講談社)。

また、夜食時分には咄本的浮世草子の前掲二書その他『座敷咄』(元禄一〇)がある。

二八 島田肇也氏(「新撰狂歌集」と「新田狂歌誹諧聞書」と「古今夷曲集」と)『文学史研究』(第一五号)に拠る。

二九 この二書については、私自身口頭発表したことがある(昭和五一年秋・日本近世文学会秋期大会・於神戸・松蔭女子大)。

また板坂元氏はポストン美術館所蔵本を紹介されている(『近世文芸 資料と考証』第一号)。

なお、他に祐信画の絵本として『女中風俗玉鑑』(享保一七)があるが、これは性格が異なる。

三〇 『情ひいな形』(正徳二)・『手管仕様帳』(長谷川強氏「手管仕様帳と陽台三略」『文学語学』第二九号)を加えて、一項をたてても良い。

三一 他に、八文字屋から次の二書が出ているが、これは旧稿と思われるので省いた。

(1) 『當世御伽曾我』(正徳三)。(2) 『風流東鑑』(同)。

本稿は一九七九年春、武蔵野書院から刊行予定の『世間子息氣質』(野田壽雄先生と共著)に対する注釈作業で得た感触に負うところが多い。

(一九七八・一〇・一一受付)

紀 要 第 15 号 正 誤 表

ページ	行 (表/行)	原 文	訂 正
目 次	17	「世間息子気質」論	「世間息子気質」論
2～13	頁上段の見出し	斎藤：教育内容論—ヤスバース— に即して	斎藤：教育方法論—ヤスバースに— 即して
52	25	<i>Macbeth</i>	<i>Julius Caesar</i>
57	4	(<i>Human Mnsic</i>)	(<i>Human Music</i>)
25	表/16～22		

原 文

(二の二)	①「智恵才覚には～髪をおろさせ」	6 7 1 2 3	①『二十不孝』	(巻1の4)	? (長) (長)
	②「一子を育てる苦勞話など」		②『二十不孝』	(巻4の3)	
	③「町人の家業～無常を觀じ」		③『織留』	(巻1の1)	
	④「白楨龍につくつて」		④『名残の友』	(巻5の6)	
	⑤「光陰流水の如く～速に暮て」		⑤『敗毒散』	(巻5の3)	
	⑥「骨牌場面の描写」		⑥『御前義経記』	(巻8の1)	
	⑦「外門あらけなく～つかひなり」		⑦『五人女』	(巻4の2)	
訂 正					
(二の二)	①「智恵才覚には～髪をおろさせ」	6 7 1 2 3	①『二十不孝』	(巻1の4)	? (長) (長)
	②「一子を育てる苦勞話など」		②『二十不孝』	(巻4の3)	
	③「町人の家業～無常を親じ」		③『織留』	(巻1の1)	
	④「白楨龍につくつて」		④『名残の友』	(巻5の6)	
	⑤「光陰流水の如く～速に暮て」		⑤『敗毒散』	(巻5の3)	
	⑥「骨牌場面の描写」		⑥『御前義経記』	(巻8の1)	
	⑦「外門あらけなく～つかひなり」		⑦『五人女』	(巻4の2)	